

チベット縦断

2000年、チベットをめぐる旅に出た。
チベットには縁があつて何度か旅していたが、
東部のカム、アムドと呼ばれる地域にはまだ行ったことがなかった。
そこで、四川省や青海省などのチベット周縁を旅しながらラサを目指し、
最後はヒマラヤを越えてネパールへ抜ける旅を計画した。
秋、十月、旅は四川省の省都・成都からスタートした。

後藤ふたば [文・写真]



故障したバスを押す乗客。下はジーンズでも上は伝統的なチベット服(四川省紅原付近)

成都からしばらくは舗装道を走り、それを下りるとすぐに山道に入った。深夜、バスが停まった。星明かりもない真つ暗な山中で、全員荷物を持つて下ろされる。と、遠くからヘッドライトが近づいてきた。見れば巨大なダンブだ。これに乗るらしい。差し出された手をつかんで高い荷台によじ登ると、ダンブは肅々と山道を進み始め、やがて蛍光灯が灯るトンネルに入った。
天井には「絶対に完成するぞ、二郎山トンネル!」というスローガンが飾られていた。トンネルは工事中だった。本来走れるはずのない場所を、資材の山を避けながら延々と進み、やがて向こう側に抜けると、煌々とした月の光に照らされた。
四川は昔から「四川の犬は太陽に驚いて吠える」と言われるほど曇天の多い土地だ。それが二郎山を越えた途端に雲が晴れた。四川盆地を出て、チベット高原の縁に入ったのだ。チベットはもつと遠くにあると思っていた。成都を出てまだ半日も経っていない。あつけ無のような不思議な気がした。
月明かりの下を私たちは荷台に立つたまま運ばれてゆく。やがて車が停まり、そこで再びバスに乗り換え、康定

都からチベットの入り口である康定^{カンディン}へ向かう寝台バスは満員だった。ルート上には二郎山という難所があり、この山を越えるか迂回するかで所要時間が大幅に違うらしい。乗客が運転手に到着時間を聞いている。答えは「明日の夜」。別の乗客が、運転手の助手に時間を聞いている。答えは「明後日の昼」。また別の乗客が、運転手の妻に時間を聞いている。答えは「明日の朝」。さてどれが正解なのか、バスは午後4時に走りだした。



同じ部屋で生活を共にする若い僧侶と小坊主君たち(四川省朗木寺)

に向かう。康定到着は午前5時。正しかったのは運転手の妻だった。

カムバの町と砂嵐——カムの旅

康定は中心に川が流れる谷間の町だ。チベット族が多く、刀を腰に挿したカムバ・チベット族もよく見かける。ここから西へ、炉霍^{ルホ}、甘孜^{カンズ}、馬尼干戈^{マニカンゴ}、徳格^{デルゲ}と進む道は川藏北路と呼ばれ、チベット自治区の要衝チャムドを経てラサに至る。残念ながら外国人はこのルートでのチベット入りは許可されておらず、行けるのは四川省側最後の町、徳格までだ。

徳格行きのバスは翌日の発車だった。早朝に走りだしたおんぼろバスは、いきなり峠道に差し掛かり、あえぎながら上って行く。けっこう上るなと思いはしたが、峠を通過する時に4290メートルと看板が出ていて驚いた。どうりでめまいがするわけだ。

徳格までは1泊2日。初日は山腹に広がる僧房群がみごとに炉霍泊、翌日もまた早朝発で徳格を目指した。甘孜までは舗装道だったが、そこから先は砂利道になった。

車窓からは、空を突き刺すようにそ

びえる険しい山が、常にどこかに見えているが、道はそれほど険しくはない。低山と丘陵地の繰り返しだ。時々峠を上り、下る。下りきると川に沿ってしばらく走る。流れが細くなつてくるとまた峠にさしかかる。同じような風景が繰り返されるので、疲れた頭は「あれ、ここさつき通った？」などと考えだすほどだ。

馬尼干戈では、同乗していた公安官僚を、土地のカムバ族が表敬訪問する場に遭遇した。砂ぼこりの中、チベット服で正装したカムバ族たちが長老を真ん中にずらりと立っている姿は、西部劇の1シーンのような。迎え撃つ若い漢族の官僚は、仕立てのよい制服に身を包み、よく光る銀色の短銃を腰に挿して油断なく、かつ相手を刺激しないよう丁寧に対応していた。儀式を終えて乗り込んできた官僚と目が合った。逸らそうとしたが逸らせない、強烈な眼光だった。

徳格まで来るとチベット色がますます濃くなり、カムバ族が腰の刀を見せつけながら、肩で風を切つて歩いているのをよく見る。このあたりはチベット動乱の激戦地だった。谷間にへばりついたような小さな町は、そのせいか

少し暗く殺伐と感じられ、早々に東へ引き返すことにした。

戻るバスは康定行き。来た道をそっくり引き返すのは何だか損をした気分だが仕方ない。宿泊予定の甘孜に着く1時間ほど前から風が強くなり始め、やがて砂嵐になった。最初は雪かと思ひ、ヘッドライトに照らされて乱舞するのが砂だと知った時は驚いた。やがて車内にも砂が侵入し、乗客は大騒ぎだ。家々が風避けの雨戸を閉め切った町に着いたのは夜の9時過ぎ。バス駅併設の宿は外国人はダメの一点張り、私は砂嵐の中に放り出された。

前後左右上下斜め、容赦なく吹き付けてくる強烈な砂嵐に、目も開けられず、呼吸もままならない。建物の壁に手をつき、顔を下に向けて、なんとか町の中心と思われる方向に進んでいると、どんと人に突き当たる。

「なにをしている、どこへ行く」と耳元で怒鳴られ、「ホテル」と叫び返すと相手はうなづき、私を引きずるようにして宿まで連れて行ってくれた。助けてくれたのは3人の若い兵士で、巡回中に私を見つけたのだと言う。防砂ゴーグルを着けた彼らは、「もう外に



この旅で最初に越えた海拔 4000 メートル以上の峠、折多山。10 月半ばでもこの積雪（四川省康定）



チベットには草木などない印象があるが、カムは木材が豊富でチベット式ログハウスが多く見られた（四川省甘孜）



チベット文化圏は広大で、現在はいくつかの行政区に分かれている。おおまかには、カムと呼ばれる東部は四川・雲南省に、アムドと呼称される西部は青海省に、カムと呼ばれる南部は四川省に属する。自治区への旅行には許可が必要だが、他のチベットエリアには比較的自由に出入りできる。

- ①成都 ②康定 ③炉霍 ④甘孜 ⑤馬尼干戈 ⑥徳格
⑦紅原 ⑧朗木寺 ⑨夏河 ⑩西寧 ⑪格爾木
⑫ラサ ⑬シガツェ ⑭ラツェ ⑮カトマンズ

回想紀行

出るなよ」と何度も念を押して去って行った。

翌早朝、宿を出ると降るような星空だった。嵐が何もかもさらっていった町は静かで美しく、昨夜のことが嘘のようだ。昨日と同じバスに乗り、見覚えのある道进行き、途中の八美でアムド方面に進路を変えた。

大草原を進む——アムドの旅

カムからアムドへと、川に沿って北へ進む。丹巴という町の周辺は標高が低いのか、まだ木々の緑が濃く、せせらぎに落ちる木漏れ日が柔らかい、チベットのイメージからはだいぶ遠い穏やかさだった。

町から町が遠く、その間にはなにもない。時折、山の中腹に白い壁の民家が点在しているくらいで、どこまでも無人の地が続く。紅原、若爾蓋のあたりは特に広大な草原地帯だ。

夕闇が迫るころ、他の乗客が騒ぐので外を見ると、馬を駆るチベット服の男が二人、バスを追いかけて来ていた。追いつくと、うまく並走してみせる。片方はまだ少年だ。手を振ってみると、にやりと笑って拳を突き上げてみせた。

やがて二人はすつと道路から離れ、草原の中に吸い込まれていった。

甘肅省との境に朗木寺という村がある。その小ささゆえにさまざまな意味で取り残され、結果としてチベット色が強い。数年前にこの噂を旅先で耳にして以来、ぜひ一度と思っていたのが実現した。宿と食堂とお寺はあるが、他にはなにもない、とても静かで穏やかな村だ。砂嵐以来咳が止まらず、体調を崩していた私は、ここで五日ほどゆっくり羽を休めた。

村には二つの寺があった。どちらも丘の斜面にあり、地元の人々の周囲をぐるりと回って祈りを捧げる。アツブダウンのある巡礼道をお寺を自分の右手に見ながら歩いていると、ゆっくりに回る老人を追い抜いたり、買い物にでも行くのか連れ立って歩く僧侶とすれ違ったりする。出会う人は誰もが笑顔を見せてくれ、カメラを見せれば気軽に撮影に応じてくれる。

長い歴史のなかで、この村だけが無傷であつたはずもなく、嵐に翻弄された苦しい時代もあつただろう。空はどこまでも青く、まるで何事もなかったかのように雲が流れてゆくのだが。

10年ぶりのラサ

朗木寺から夏河を経て青海省都・西寧に行き、さらに列車とバスを乗り継いでラサに向った。列車の終点の格爾木は海拔2800メートル。そこを出たバスは一気に4767メートルの峠を上って青藏高原に至り、5206メートルの峠を最後に、高度を下げながらラサに達する。二日がかりの危険な移動だ。ある程度高所順応はしていたはずだが、それでもこの標高に長時間留まるのは体に悪い。途中で食事休憩があつても何も食べられず、二日目の夕方によくやくラサが遠望できた時は「助かった」と思った。

予想はしていたが、ラサはずいぶん変わっていた。ビルが増え、道幅が広がって多くの車が走り、チベット色は薄まった。ポタラ宮の下にはかつて集落があつたはずだが、美しい広場になつてた。十年一昔と言うが、その通りだ。

それでも町の中心にあるジョカン寺と、それを取り囲んで一周するバルコルという巡礼路は以前と変わらず、大勢の巡礼者でにぎわっていた。お香の

煙が一日中絶えることなく漂い、見事な皮のチベット服を着た家族連れがあちこちで座り込んで休んでいる。地面に体を投げ出して聖地へ進む五体投地の人。巡礼たちが回すマニ車の乾いた小さな音。真言の呟き。人々は朝から晩までバルコルを回る。

彼らと同じ方向にゆっくり歩く。疲れたら茶館でミルクティーを飲む。そしてまた歩き、休む。お腹が減ればチベットうどんを食べる。ラサの1日はそうして過ぎていく。この外側にある世界はずいぶん変わっているのだが、ここは何ひとつ変わらないように思える。それまたぶん錯覚なのだろうが。

バルコルの露店でチベット服を買った。袖のない珍しい形で、ちょうど作つた人が売りに来たのを、そのまま譲ってもらったのだが、いい買い物できた。

ネパール国境へ

ラサからカトマンズまではヒマラヤ・ハイウェイが結んでいるが、バスはラツェという町までしかなく、そこからネパール国境までの320キロ余りには公共の移動手段がなかった。

回想紀行



チベット仏教黄帽(ゲルク)派六大宗院の一つラブロン寺(甘肅省夏河)



ラブロン寺参道を歩く巡礼の女性たち(甘肅省夏河)



立派な羊皮のチベット服を着た老婦人たち。右側の人は手にマニ車を持っている(四川省朗木寺)



チベットの大河ヤルツアンポー。橋のない場所ではフェリーで対岸に渡る(チベット自治区タドゥカ)

ある一軒家の前で停まった。なかに入ると、大勢の回族の男たちがぎやかに食事をしていた。テーブルの上には羊肉を煮たものが大皿にドーンと盛られて湯気を上げ、男たちは揚げパンと共にそれを食べている。お金もないので安い揚げパンを一つ買い、隅っこで食べていると、運転手のボスが声をかけてきた。

「こつち来て一緒に食いな。なに、銭がない? 心配するな俺のおごりだ。客人にそんなところでパン食われちゃ俺の面子が立たないだろうが」

男たちに混じって骨付きの羊肉にかぶりつき、熱々のうどんをすすり、そしてまたトラックに乗って走り続けた。満腹で眠くなるが、こつくりすると運転手が肩や腕を叩いてくる。「寝るな、何でもいいからしゃべれ、俺も眠くなるだろ」

洗濯板のように削れて気が狂いそうな振動を送り続ける未舗装の道进行、5100メートルの凍る峠を越え、だんだん標高が下がってきたなと思った時、前方に列をなして停車しているトラックが見えた。そこが終点だった。中国側国境ゲートまで残り2キロ、11月も終りに近い日の、夜が明けるほんの少し前だった。



メインストリートもしばしば家畜に占領される(チベット自治区ラツェ)



歴代ダライ・ラマの住居だったポタラ宮殿。現在は博物館として公開されている(チベット自治区ラサ)

それでも多くの人が行き交う国境だから、何かしら手段はあるだろうと、途中シガツェを挟んでラツェに向った。ラツェは街道の分岐点にある小さな町だ。直進すれば西のンガリ地方へ、左折すれば南のネパール国境へ向かう。

二日目、道端で待っていると、3台のトラックが連なってやって来た。聞けば国境行きで、乗せてくれると言う。しかし言い値が高い。ボスと交渉を重ねてようやく折り合ったが、それを払うと私の所持金は残りわずかとなった。運を天にまかせて、大きなトラックの助手席に収まり、国境に向けて走り出した。出発は午後2時。人の良きような運転手は蘭州からネパール国境を常に行き来しているようだ。

その日は朝からずっと何も食べていない。どこかで食事休憩をするだろうと我慢していたが、時刻6時、7時と過ぎてその気配がない。

「俺たち回族だからよ、今ラマダンなんだよラマダン、わかる? だから日付が変わるまで飯は食わないから」

空腹で目が回りそう、いや高度障害なのかもしれないが、ともかく宗教的理由では仕方がない。

やっと日付が変わり、トラックはと



バルコルの露店で装飾品に夢中の遊牧民(チベット自治区ラサ)

この旅から14年が過ぎ、チベットは大きく変わった。2006年に青藏鉄道が開通し、それまでよりもはるかに多くの人と物が自治区に流れ込むようになった。鉄道をインドまで延伸する計画も進んでいる。チベットはもはや秘境ではない。

08年の四川大地震も忘れてはならない。この旅で私が通過したエリアも、大きな被害を受けた。人々が被害から立ち直っていることを祈るばかりだ。

11年に、アムドとカムを再訪する旅をした。少し西寄りのルートを行ったが、道路がよくなり、バスも増え、行く先々では寺院の大改修工事が行われていた。漢族の尼さんにもたくさん出会った。チベット僧姿の漢族女性など、少し前なら考えられない話だ。

猛スピードで変わっていくチベットが、これからどうなっていくのかを見守り続けたい。私は、ほぼ10年ごとにチベットを旅してきたので、次は2020年ごろに彼の地を訪れたいと思っている。

回想紀行

2000年
チベット縦断



商店の看板は漢語とチベット語の併記(チベット自治区タマ)



路面が凍結し渋滞するヒマラヤ・ハイウェイ(チベット自治区)